

## 自由論題 4「中国と(北)朝鮮」・報告 3

### 報告テーマ

1975 年における金日成の海外視察を通じた南北統一政策の変容

### 氏名（所属）

若杉美奈子（東京大学・院）

### 要旨（800 字程度）

本報告は、1975 年のインドシナ情勢の急変が金日成の南北統一政策に与えた影響について焦点を当てたものである。1956 年以降の中ソ対立に起因する陣営内対立により中ソ等距離外交を推進してきた北朝鮮は 1966 年にインドネシアで自主外交宣言をした後、1970 年代から既存の陣営の枠組みに囚われない「脱陣営」外交へと政策を転換した。とりわけ 1973 年の第 4 回非同盟首脳会議は、北朝鮮が非同盟路線を推進する契機となり、第三世界に対する外交攻勢に一層拍車をかけた。

北朝鮮は外交力の向上に伴い、1950 年代から国連で議論されてきた駐韓米軍撤退問題及び国連軍司令部解体問題等を柱とする、いわゆる「朝鮮問題」の解決のため、1970 年代前半から国連総会での韓国側支持国との表決を目指した。同問題は 1974 年に初めて表決に持ち込まれたが、北朝鮮は賛否同数による否決という苦杯を喫した。そこで国連での支持を拡大するため 1975 年の北朝鮮外交は非同盟への正式参加を目指すことになった。国連における非同盟勢力を無視できなくなった韓国もまた、北朝鮮を牽制するために非同盟正式加盟を目指し、南北間では熾烈な競争が繰り広げられた。

インドシナ情勢の急変は、国際社会を取り巻く環境にも影響を及ぼした。ベトナムとカンボジアの共産化は、赤化統一を目指す金日成を鼓舞したが、武力統一の意思の有無については論争がある。沈志華（2016）は、金日成には武力行使の意思があり、毛沢東との 4 月会談で、武力統一の意思を伝え軍事支援を要請しようとしたが、毛沢東に拒絶されたと主張する。しかし、決定的な史料が提示されたわけではなく推測の域を越えない。当時の北朝鮮にとっては国際社会の支持を得ることが絶対命題であったことから、武力統一の意思がなかったとの見方が有力であるが、依然として戦争の意思を肯定する言説が根強い。本報告では、こうした言説の根拠となる東欧諸国の一次史料を検討し、考察を加える。